

interview インタビュー

日本の伝統芸能である狂言について、和泉流狂言師である九世万蔵氏に、伝統を守ることの難しさについてお話を伺った。

(聞き手：高岡 信男)

プロフィール のむら・まんぞう

和泉流狂言師。1965年東京生まれ。野村萬（七世万蔵）の二男。祖父六世万蔵及び父に師事。4歳で「靱猿」で初舞台。以後「釣狐」「金岡」「花子」などを抜く。2000年、万蔵家分家・与左衛門家を150年ぶりに再興して二世与十郎を襲名。2005年、九世万蔵を襲名。重要無形文化財総合指定。東京芸術大学、桜美林大学講師。2006年初春の1月9日に国立能楽堂で「萬狂言 冬公演～千支づくし～」の公演が予定されている。

狂言師

野村万蔵さん

——小さいころから狂言の道へ進むと決心されたのですか。

3歳で初舞台に立ってから、ずっとやってるんですけど、17歳位の時に父（人間国宝・野村萬）に狂言師を一生の生業としてやっていくのか否かと言われ、そのとき狂言をやっていこうと決心しました。

率直に言うと、自分はもうほかに能力はないんじゃないか。もちろん格好よく言えば、狂言が好きだとか言えるかもしれない。いろいろ反発しながらも、「あー、今更、他の職業を選ぶのも…これしかないんじゃないか」なんて、思うわけですよ。伝統を受け継がせていく立場の人間が次の世代をやる気や立場にさせるということが、必要なんですよ。私もいろんな職業に就きたいと思ったこともありますけど、弁護士だけはなかったな（笑）。

——伝統の重みは、どういう場面で感じますか。

僕には兄がいて、去年急に亡くなったんです。私なりに一所懸命、狂言をやってはきていましたが、

それは次男坊としてのもので、兄の急逝により、いきなり九代目の当主になってしまった。なってみますと、大変な重圧を感じる。そんなわけで、自分のことはあまり考えられない、自分は二の次、三の次で全体のことやほかの人間のことを考えていく、あるいは狂言界という世界のことを考えていくようになりました。

——いろんなものを背負い込んでいらっしゃる。それと同時に自分の芸も磨かなきゃいけないわけですね。

やっぱり芸人ですから、板の上にたってへたくそじゃだめなんですよ。芸もちゃんとできてほかのことも両立させていく。幸いに父は76歳ですけどまだ健在で、悩んだところは芸の技術もちろんですけど、教えてもらいます。もし父がいなくても、自分に対して周りの人たちから助言をいただける態度とか行動をしていくことが必要なんですよ。言ってもらいやすい、気づかせてもらえるという日ごろの付き合いをしていくことが大事です。



海外公演はほとんどヨーロッパ、文化芸術が生活に根付いている。見る目があるという面では日本人より数段上だと感じますね。

——野村家に伝承されているものはあるのですか。

面・装束のほかには代々の当主が書いた台本があります。でも、あとは口伝なんです。有名な言葉で言えば、猿に始まり狐に終わるとかね。そういう言葉はありますけど。狂言の家に生まれたら、3～4歳で猿という子猿役で初舞台を披いて、釣狐というのを20代から30代くらいでやるんですよ。それを世間で例えると、修士論文や博士論文あるいは司法試験かそんなものになるんですよ。

——それは、お父様から口伝で全てを吸収して、それをまた伝えていくのですか。

筆まめな人もいれば、何も書かない人もいますよ。こうやってこう動くとかこうしゃべるとか言う人もいれば、何にも残さない人もいます。しゃべりながらじゃなくても、稽古を通して一緒に生活して生き様を見せて指導するわけですね。芸事を含めたそれが口伝というものです。体伝でもいい。だから早く死んじゃうとだめなんですよ。だから、私の目標は80歳まで絶対生きると。たくさん伝えていかないと。

——海外公演などの海外の方たちの反応は？

海外公演はほとんどヨーロッパです。狂言を見て笑うところとかツボが違ったりしますが、文化芸術が生活の中に根付いているから芸術を見慣れている。興味があるっていうだけじゃなくて、自然と見慣れている。見る目があるっていう面では日本人より数段上だと感じますね。

——伝統を引き継いでいくのと同時に、新しい工夫を取り入れていくということもやってらっしゃると思うんですけど。

我々の伝統芸能は600年続いて何人の人間が携わってきたかを、考えてみればわかることです。常に先人がやっていたことを受け継ぐにしても、新しい、その時代に生きていることを大前提として、それをテーマにしてやっているはずなんですよ。それがちょうどバイオリズムのような波になる。そうするうちに真ん中のちょうどいいところが太くなって行って、それが家の方針なり演出なりに、心ってものになるんです。

——ファンを増やすための努力とか活動はどんなことを？

地方公演に行ったりして、来てくれた人とよく話す機会を持ったり、握手したりして、お客様とふれ合う場を積極的につくっています。僕らは一応無形の財産ですから、同じ空間・場所、時なり空気なりをいっしょに過ごしたりして成立するんです。地道だけどその空間に来てくれた人にまたどれだけ来てもらえるか。人と人との接し合いというのは時間がかかる。だから一人だけでやろうとは思わない。仲間と一緒にあるいは、世代をこえてやっていかなければと思っています。

——また、狂言を教えていくうえで一番難しいのはどんなことですか。

一番難しいのは、心を教えることです。真似をさせるんで器用なやつはすぐできる。心が教えられるということは技術でない人生観のようなものがあるかどうかということで、それが難しい。何年何十年もかかって、総合的に心を伝えていく。だから難しい心は時間がかかる。教える方も教えられる方も、本気になる。これが大事なんです。

——弁護士とか弁護士会になにか期待していることがあれば。

僕らの職業っていうのは、滅びつつある日本の社会制度や常識を引きずっていきながら現代社会に生きているわけで、そうすると、今までは暗黙の了解とか、ここは踏み込んじゃいけないとかというところが日本人として常識線であったのに、今は訴えたもの勝ち。登録したもの勝ち。これじゃ僕たちの「秘するが花」という控えめな文化は滅びるかもしれない。ぜひ、弁護士さんにそういうところを、ちゃんと我々祖先が作ってきた暗黙のルールをどれだけ反映して、日本の文化を守っていただけるのか、やっていただきたい。

(構成：高岡 信男)